



愛研技術通信

2010年新春のご挨拶

みなさんあけましておめでとうございます。
今年一年が皆様方と御家族、そして弊社にとって良い年となりますよう、
心から願うものであります。

年初にあたりまして、一言ご挨拶申し上げます。

日頃は一方ならぬご厚情を賜り、心より厚くお礼申し上げます。

昨年の一文字は、「新」。この文字だけ見れば、前途に何か期待感を懐かせてくれる響きがありました。しかし 2008 年のリーマンショック以来、日本の経済は陥没不況といわれ続け、とりわけ 2009 年は深刻でした。本格的な政権交代ということで、これまでの古い体質全てを見直し、新たなスタートを切る絶好の機会を感じさせましたが、景気回復のための有効な政策を打つことが難しく、昨年 11 月にはデフレ宣言が発表される始末でした。安売り競争で企業は利益を減らし、それに連動して賃下げや失業で消費が冷え、さらに物価が下がるという、景気悪化と物価下落の負の連鎖（デフレスパイラル）に陥ってしまう心配があり、現在の不況があとしばらく続くと覚悟しなければならないかもしれません。

考えてみるとこれらの諸問題は、規模が世界的であり、日本だけで解決できるものでないかもしれません。しかしこれは、人間性を無視した一過性の利益の追求や過当競争、虚構に踊らされた結果であろうともいわれています。今こそ、地に足をつけ、明確な企業理念をもち、正しい倫理観と社会への貢献、そして、身近な地域環境をはじめ、生命を護るために地球規模での環境問題に取り組んでいくことが、人として、企業として、最も求められていると思います。このような中、弊社（株）愛研は昭和 46 年創業以来 39 年、人の成長期に例えれば、青年期から壮年期を迎える時期に差し掛かっている、と言って良いでしょう。決して若い会社ではありません。この時期の「世代性」は、おそらく、次の世代を育むという仕事に積極的に関与する、あるいは関心を高める、というような意味が込められています。つまり、会社なり、何かの組織なり、次の世代を育てることを含みます。あるいは、自分自身が深めたものを次の世代に託す、といった意味も含まれるかもしれません。この次の世代を育成することに希望を持ってないと、組織的にも個人的にも、また社会的にも、「停滞」してしまう傾向があるように思えてなりません。もちろん、39 年という時間軸は重く受け止めなければなりません。改めてこれまで当社を支えて下さったお客様各位、また社員やその家族の皆様方には心より感謝申し上げます。

さてこの厳しい状況の年に私たちはどのように、今の経済環境を乗り切るべきか、嵐の通り過ぎるのをただ待つのか、やはりここは、じっとしては嵐に翻弄され流されていってしまうでしょう。私たちは「さすが株愛研だ。」「株愛研なしでは仕事にならない。」そんなお客様から評価を頂けるような会社にするべく、価値ある弊社を通して皆様に選んで頂けるよう努力する所存であります。ほんものの指向のためには、社員も本者、成果品も本物であることがまず求められます。そのためには、社員の教育訓練や多彩な人事交流を通して頼られる社員を目指します。また、時代の変化は一段とスピードが速くなってきました。本当にお客様が必要とするほんものだけが要求される時代となり、私たちも化学分析・機器分析を軸にした技術力という特殊性を生かし、営業・サービス体制を整えてお客様の様々なニーズに対応していく所存です。

最後に、今年の弊社のキーワードは「飛躍」。いよいよ壮年期に差し掛かった弊社の技術力を着実に「前進」させ、さらに大きく「飛躍」することを目指します。その意味で「前進・飛躍」をモットーに、新たな気持ちで社長就任 2 年目に臨む所存です。社員一丸となって力を合わせて、この一年を夢のある明るい年にしたいと願っております。これからも一つ一つの出会いを大切にしたい、これこそが、向上と繁栄の基本であることを肝に銘じつつ……！

2010年元旦

株式会社 愛 研
代表取締役社長 鎌田 務

ひとことコラム

寅年にちなんで、今年初めての「ひとことコラム」は「トラと生物多様性」から。ご存知のとおり、2010年は国際生物多様性年であり、10月には、愛知県・名古屋市において生物多様性条約第10回締約国会議(COP10)が開催されます。この条約は、1992年、地球サミットで採択されたもので、生物の多様性を「生態系」「種」「遺伝子」の3つのレベルで捉え、生物多様性の保全、その構成要素の持続可能な利用、遺伝子資源の利用から生じる利益の公正な配分を主たる目的にしています。しかし筆者が、この生物多様性というコトバを本格的に知ったのは、鷲谷・矢原の両氏が著した「保全生態学入門 - 遺伝子から景観まで -」が1996年に文一総合出版から出版されたのがきっかけでした。その著書には、私たちのすぐ身の回りにいる極あたりまえの種までが絶滅の危機に晒されていることが記されています。例えば秋の七草の一つに数えられるフジバカマは、今では極限られた川の河原に細々と生き長らえているだけ。それだけでなく、キキョウもオミナエシも、野生のものを目にするのは難しく、そのような例は、枚挙にいとまがないと記されています。

このように、あたりまえのように目にしていた種類が絶滅の危機に直面している事態は、食物連鎖の最上位に位置するような動物たちはもっと悲惨な状況になっていることを予感させます。その一つに「トラ」が……トラは現在、アジアに広く生息する一種に限られていますが、地域や生息地の環境、生態によって9つの亜種に分類学上分けられています。しかし、森の生態系の一構成員として重要な役割を果たしているトラは、人間による密猟や森林伐採によ

る生息地の減少などの理由で、絶滅の危機に瀕しています。トラは20世紀初頭10万頭が生息していたものが、現在では、地球上に残っているトラはわずか4000頭ほどまでに減少したとされています。国際自然保護連合(IUCN)によると、野生生物種ごとの絶滅危機の度合いを査定・ランク付けを行った結果、2009年のトラ危機のランクは、バリトラ、ジャワトラ、カスピトラの3亜種がEX(絶滅亜種)、スマトラトラ、アモイトラの2亜種がCR(近絶滅亜種)、シベリアトラ、インドシナトラ、ベンガルトラ、マレートラの4亜種がEN(絶滅危惧亜種)と、それぞれのカテゴリーに位置づけられています。トラが減少しているなら、それは、命のつながりが弱くなっていくサインにほかなりません。

ですから、トラに限らず、私たちがまだ知らないたくさんの生物も含めて守ることができたら、生物多様性を健全に維持できるはずですよ。

話は突然大きく飛びます。中国の古い説話に、『虎が三頭の子を産むと、一頭は擽猛な彪(ひょう)になるとされ、目を離すと、ほかの子を食べてしまう恐れがある、親が苦心するのは川を渡る時だ、親はまず彪を向こう岸へ連れていき、次に別の一頭を渡す、その帰りに彪を、元いた岸に連れ戻り、残っていた子を対岸へ。最後にもう一度戻って彪を対岸に渡すのである』という例えがあるそうです。この説話から「虎の子渡し」といえば、苦しい生計をやりくり算段するたとえである(中日春秋、2010.1.1)。

今年も当面は、あらゆる場面で「虎の子渡し」が避けられそうもないようです。社長曰く。その中で社員の意識改革が芽生え、新たな市場開拓ができ、「大変だったが会社が強くなった」と思える「前進・飛躍の年」にしたいものです。

(2010.1.3.田中庸央 記)

編集後記

あけましておめでとうございます。

新春を迎え皆様のご多幸をお祈り申し上げますとともに、これまで本誌にたくさんのご支援を賜りましたことに対して厚くお礼申し上げます。正月早々、豪雪警報が各地で発令されるなど、多難な前途を思わせる年明けとなりましたが、本年もよろしくお願い致します。

昨12月をもって満3年を迎えた本誌は、本年も新たな飛躍と可能性を求めて、一步一步、退化(停滞)させることなく進化(発展)させるよう、取り組んでいきたい、と肝に銘じております。

今後とも、ご指導、ご鞭撻をたまわりますようお願い申し上げます。(2010.1.4.編集子)

株式会社 愛 研

(<http://www.ai-ken.co.jp>)



本社 〒463-0037 名古屋市守山区天子田 2-710

電話(052)771-2717 FAX(052)771-2641

半田営業所 〒475-0088 半田市花田町 2-65

電話(0569)28-4738 FAX(0569)28-4749